

目をこらして (23)



琴の音が静かに流れる。

畳が敷き詰められ、いつもとは違う空気が満ちている。

三月三日、遊戯室はお茶会の会場となる。

静かに遊戯室に入ってきた子どもたちは、正座をして待つ。子どもたちの前で、着物を着たお茶の先生が、凛とした風情でお茶を点てている。子どもたちは、神妙な顔でそれを見ている。

お茶菓子を盛った器が、まず子どもたちの前に置かれた。子どもたちは、薄桃色のきれいなお菓子に目を奪われながらも、それをそっと自分の懐紙の上に取り隣の人に渡していくという動作に心を奪われている。

菓子を口に運ぶ。おいしいね、と言う顔で隣の友達と静かに頷きあっている。

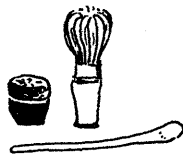
お茶が、子どもたちの前に運ばれる。

礼をして、お茶をいただく。

お茶碗を両手で包むようにして飲み干している友達を、どう？ おいしい？ とでも言いたげに見守っている。

全てが、静かな中で進んでいる。

その日
遊戯室には、
ちがう風が、ゆったりと流れる。





耳をすまして

子どもたちも、私も、久しぶりの静寂の中にいた。
口に含んだお茶は、ごく少量なのに、たっぷりいただいたような、心の満足感がある。

お茶をいただく時も、その前のお茶菓子をいただく時も、隣の人に「お先にいただきます」と軽く会釈をした。そして、おいしくいただいた後に茶碗をさげてもらう時にも、「ごちそうさまでした」とお礼を言った。

お茶を飲む、という行動のまわりに、ずいぶん多くの人とかかわりがあった。それが、心の満足感につながっているのかもしれない。

「お先にいただきます」「結構なお味でした」

そんな一つ一つの言葉や行動を、改めて子どもにも伝え、手本となるようにとやってみながら、思った。

立ち居振る舞いの中に心がある。心は、立ち居振る舞いの中にあられる、ということ。

静かな気持ちで、やさしい気持ちで、今日も子どもと共
に歩いていこう。

絵と文 官里暁美 (目黒区立ふどう幼稚園)

